

早稲田社会学会ニュース 第21号

2003年4月23日発行

早稲田社会学会事務局

〒162-8644 東京都新宿区戸山1-24-1

早稲田大学文学部 社会学研究室内

Tel: 03-5286-3742

E-mail: t_enomoto@nifty.com

今回のニュースの内容

1. 第55回早稲田社会学会大会および総会開催のお知らせ
2. 本年度大会シンポジウムについて
3. 大会一般報告および『社会学年誌』第45号投稿の募集
4. 2003年度研究助成の募集
5. 2001年度研究助成の報告
6. 研究例会等の報告
7. 第21回研究例会開催のお知らせ
8. 新委員のご紹介
9. 規約改正委員会について
10. 入退会者のお知らせ
11. 学会費納入のお願い

1. 第55回早稲田社会学会大会および総会開催のお知らせ

本年度の早稲田社会学会大会および総会が、2003年7月5日(土)に、早稲田大学文学部 第一会議室において開催されます。シンポジウムのテーマは「社会学のアルケオロジー——社会学の起源を問う」です。詳細につきましては次節「本年度大会シンポジウムについて」をご参照ください。一般報告などを含むプログラムの詳細につきましては、6月中旬にお知らせする予定です。

事務局では大会での一般報告を募集いたします。報告を希望される方は、第3節をご参照のうえ、事務局宛てに郵送でお申込みください。

2. 本年度大会シンポジウムについて

テーマ：「社会学のアルケオロジー——社会学の起源を問う」

<趣旨説明>

近年の構築主義的な知見は「社会がフィクションである」ことを暴露する。しかしこの主張は、「社会は存在しない」ことを強調する新自由主義的な合理性ときわめて親和的なものでもある。社会学の対象である<社会>の存立自体が疑問に付されているこの状況において、賭けられているものは何か？ 本シンポジウムでは、この問いに対するアプローチとして、<社会>とその反省知である<社会学>とを、いったん考古学的な作業に差し戻すことにより、それらがいかに特定の歴史的条件や特定の合理性と結びついているかを検討したい。(研究活動委員 渋谷 望)

3. 大会一般報告および『社会学年誌』第45号投稿の募集

申し込みを希望される方は、以下の項目をA4の用紙1枚に記入し、事務局宛てに郵送でお送りください。両方に申し込む場合には、それぞれ別の用紙で申し込みをお願いいたします。

大会一般報告、または『社会学年誌』第45号投稿、のいずれかを明記してください

- (1) 氏名
- (2) 所属
- (3) 郵便番号、住所、電話番号、FAX番号、E-mailアドレス
- (4) 題目（副題を別として25字程度まで）
- (5) 内容概略（200～400字程度）

大会報告：申し込み締め切りは、5月末日（消印有効、郵送のみ受付）です。

『社会学年誌』投稿：申し込み締め切りは、6月末日（消印有効、郵送のみ受付）です。

なお、申込書提出後の題目、内容の大幅な変更は認められませんのでご注意ください。原稿の提出締め切りは、8月末日（消印有効、郵送のみ受付）です。分量、書式その他、投稿規定については、『社会学年誌』の最新号（第44号）をご参照ください。

4. 2003年度研究助成の募集

これまでに当学会に寄せられた寄付金により、寄付者のご意思を尊重して、次の要項により会員各位の研究活動を助成いたします。

助成対象：早稲田社会学会の発展に寄与する研究活動
助成額： 1件30万円程度を上限とする

助成を希望される方は事務局までご連絡ください。追って「申請書用紙」をお送りいたします。申請書の提出締め切りは、5月末日（消印有効、郵送のみ受付）です。なお、「早稲田社会学会研究助成取り扱い要領」の規定により、「助成の直前の年度まで継続して3年以上の会員歴がある」方が対象となります。

また、この趣旨に賛同される方からのご寄付も募っております。寄付についてのお問い合わせは事務局までご連絡ください。

5. 2001年度研究助成の報告

2001年度の研究助成の対象のうち、次の研究について研究助成報告書が提出され、2002年9月10日の理事会で受理されました。

研究題目： 「高齢期における「移住」 自己決定して移り住む人たち」
研究代表者： 高田知和（早稲田大学非常勤講師）
助成額： 100,000円

研究成果の概要について以下の報告が提出されました。

高齢期における「移住」 自己決定して移り住む人たち

高田知和（早稲田大学非常勤講師）

近年の超高齢社会のなかで高齢期に移住（移動、転居）をする人びとが増えてきている。それとともに年齢的にはまだそこまで到っていないものが高齢期を見据えて移住をする人たちも増加している。こうした彼ら彼女らは程度の差はあれ、何らかのかたちで移住を自己決定しているといえる。本研究はそうした人たちに着目して彼ら彼女らをめぐる問題点を考察したものである。

具体的な数値でみると、過去一年間の市区町村間移動率（現住地とは別の市区町村への移住）は、一般には1960年代にピークをなしてから1980年代以降は7%台から5%へと低下してきている。そのなかで高齢者、特に70歳以上人口における市区町村間移動率もこれまで低下してきたが、逆に近年は微々たるものながら上昇傾向を示してきている。これは「高齢人口移動転換」と呼ばれる高齢期移動率の反騰現象である。そこでは一般に夫と死別した女性の占める割合が高くなっており、また総じて75歳未満の前期高齢者が多い。但し移動そのものについては男性高齢者がいる場合はそのイニシヤティブによるものが多くなっている。環境の変化は年齢に関係なく不適応のリスクを担うものであり、高齢になってからのこうしたリロケーションの場合には特にそれが自発的（voluntary）であるか強制的（involuntary）であるかによって大きく異なってくる。自発的かつ自ら希望して移動する場合には転居後の生活にもうまく適応できている場合が多い。また高齢期におけるもしくは高齢期を見据えた移住には、いわゆる定年帰農に見られるような「アメニティ・ムーバー」、社会的な介護を求めての移動、子どもたちや親族の近くへの移動や同居であるいわゆる「呼び寄せ」など三つのタイプに分けて考える必要がある。

報告者は、各種文献資料の収集により如上の点を調べた後に、自らがこれまでフィールドにしていた茨城県・栃木県での聞き取り調査を行なった。アメニティを求めて移動する人たちには高齢者の場合でもイターン者が多く見られるが、こうした人たちには（以前からこれは私は感じていたことでもあるが）医療・福祉・介護の視点が欠けているように思われる。事実、移住先のむらに満足すべき医療・福祉施設がなく、その点で後悔している旨を耳にすることがあった。「自分らは既に越してしまっているから仕方がないが、これからイターンを考えている人は医療・福祉の視点を持つことが必要でしょう」という言葉にはあながち謙遜には思えないものがあった。また「呼び寄せ」られて子どもたちと同居するようになった高齢者の場合には、「呼び寄せ」という言い方に別居していた子どもの側が呼び寄せる形を連想させるが、移動してきた親の側においてこそ子どもたちとの同居を望むケースがあり、厳密に「呼び寄せ」られてのみいるわけではない。介護を目的に移住するいわゆる介護移住については、移住する高齢者独自の事情があると同時に、介護移住をプルするだけの要素がその地方自治体であり、また現住地にはそれをプッシュするだけの要素がある。畢竟地方自治体の福祉の在り方が問われることになる。

本研究では以上の3つの型に分けて高齢者の移動を考察した。今後は地域社会のあり方にまで視野を広げて検討していくことにしたい。

6. 研究例会等の報告

早稲田社会学会研究例会および学会主催の研究会等が、以下のとおり開催されました（敬称略）

コロキウム「グローバル化時代の大学院教育 デジタル・エンサイクロペディアの応用をめぐって」

日時：2002年10月7日（月）14:00-17:00

会場：早稲田大学文学部 第一会議室

パネリスト：Mike Featherstone（Nottingham Trent University）、John Tomlinson（同）、Couze Venn（同）

パネル・ディスカッション Mike Featherstone, John Tomlinson, Couze Venn 氏を迎えて

日時：2002年10月10日（木）14:00-17:00

会場：早稲田大学文学部 第一会議室

テーマ：「欧州における社会学研究の最前線 グローバル文化、文化帝国主義、ポスト・コロニアリズムの視点から」

第 20 回 (2002 年度第 2 回) 研究例会

日時：2002 年 12 月 21 日 (土) 15:00-18:00

会場：早稲田大学文学部 第七会議室

報告者 (対談形式)：太田省一 (東京女子大学) 長谷正人 (早稲田大学)

題目：「(笑)のコミュニケーションとドキュメンタリーバラエティ番組」
太田省一 (東京女子大学) × 長谷正人 (早稲田大学)

< 研究例会報告 >

当日は朝から雪が降る悪天候であったが、学部生を含む 30 名ほどが参加する盛況な会となった。長谷氏の提案により進行は対談形式で行われた。まず長谷氏から太田氏の著書について概要の報告と論評がなされ、予め提示された質問に太田氏が答えるというかたちで議論が進められた。テーマへの理解が深まるとともに和やかな雰囲気うまれ、フロアからの質問も最後まで絶えなかった。

太田氏は 19 世紀における思想・科学が身体への意識に及ぼした影響を追跡してきた研究者である。「社会は笑う」はテレビ番組における笑いの変化から日本社会の変容を論じた異色の研究である。

マンザイブーム以降、「視聴者」はテレビの笑いを積極的に評価し方向づける立場となった。「ウケル」といしながら笑う若者には、笑う自分を客観的に評価する視点が内面化されていると太田氏は指摘する。小林信彦氏は近著でテレビの黄金時代が 60 年代であると主張している。両氏はこれに疑義をとえ、80 年代以降もテレビの笑いはめまぐるしく変わり続け、コミュニケーションに新たな様式をもたらしていることを主張した。(研究活動委員 澤口恵一)

7. 第 21 回研究例会開催のお知らせ

すでにご案内のとおり、第 21 回 (2003 年度第 1 回) 研究例会が下記の要領で開催されます。今回の研究例会は、本年度大会シンポジウム「社会学のアルケオロジー——社会学の起源を問う」のプレ企画として開催されます。多数のご参加をお待ちしております。

日時：4月26日(土) 14:00-17:30

会場：早稲田大学文学部 第二会議室 (33号館 2F)

報告者および報告題目：

入江公康 氏 (早稲田大学)

「“社会的な”知——戦前日本における統治の系譜」

澤口恵一 氏 (大正大学)

「社会学におけるコンテクスチャリティの復権

A.Abbottの反省と構想によせて」

8. 新委員のご紹介

昨年 7 月の役員交代に伴い、「編集委員会規約」「研究活動委員会規約」にもとづいて、次の会員 (敬称略) が編集委員会委員ならびに研究活動委員会委員に選出されました。任期はいずれも 2005 年度の総会までです。

【編集委員】

嶋崎尚子（委員長、早稲田大学）
伊藤美登里（早稲田大学・大妻女子大学）
大屋幸恵（武蔵大学）
土屋淳二（早稲田大学）

干川剛史（大妻女子大学）
大久保孝治（早稲田大学）
店田廣文（早稲田大学）

【研究活動委員】

長谷正人（委員長、早稲田大学）
澤口恵一（大正大学）
岡本智周（日本学術振興会）
大谷 崇（高崎経済大学）

加藤彰彦（帝京大学）
渋谷 望（千葉大学）
榎本 環（早稲田大学・武蔵大学）
笹野悦子（早稲田大学）

9. 規約改正委員会について

2002年9月10日の理事会において、学会規約類に関し、「個々の規約がそれぞれ独立に制定された経緯から、用語・表記の不統一など規約相互間の整合性が不完全であり、これを修正する必要がある」との前理事会からの引継事項が報告されました。審議の結果、次の諸点が申し合わされました。

- * 新理事会の施策として、（表記上の修正にとどまらず）内容についても見直しを行い、修正すべき箇所があれば検討を進める。
- * 専門プロジェクト「規約改正委員会」を編成し、同委員会で検討作業と修正原案の作成を行う。
- * 同委員会は次の新旧理事8名をメンバーとする。（敬称略）
正岡寛司（会長） 長田攻一（庶務担当理事） 池岡義孝（庶務担当理事）
嶋崎尚子（編集担当理事） 長谷正人（研究活動担当理事） 成富正信（会計担当理事）
那須壽（前理事） 土屋淳二（前理事）
- * 検討作業の期限は、2004年の総会を目標とする。

10. 入会者のお知らせ

2002年12月21日の理事会において次の2名の入会が承認されました。（敬称略）

樫田美雄（徳島大学総合科学部助教授）
山根伸洋（早稲田大学文学部非常勤講師）

11. 学会費納入のお願い

今年度の学会費を、同封の「郵便振替払込書」にてお振り込みくださいますようお願い申し上げます（発送事務作業の都合上、今年度分をすでに納入されている方、および名誉会員の方宛てにも同払込書を同封いたしますことをお赦しく下さい）

年会費： 一般会員 5,000円 学生会員 3,000円

口座番号： 00100-3-38020
加入者名： 早稲田社会学会

新年度にあたり、ご所属・ご連絡先等に変更がありましたら、その旨を通信欄にお書き添えください。

早稲田大学にご所属の方へ

mn システムの廃止に伴って変更なされたEメールのアドレスをお知らせくださいますよう、ご協力をお願いいたします。

会費を3年以上滞納されますと、2000年7月8日の総会決議および2000年12月16日の理事会決議にもとづき、会員資格の一部が停止されます(次の3つの権利が失われます。学会大会で報告すること 『社会学年誌』へ投稿すること 『社会学年誌』の配布を受けること)のでご注意ください。

以上